

掲示版

こ〜じのう

創刊号



発行所 (社福)千葉県身体障害者福祉事業団
 千葉県千葉リハビリテーションセンター
 発行責任者 高次脳機能障害
 相談支援体制連携調整委員会
 委員長 吉永 勝訓
 〒266-0005 千葉市緑区誉田町 1-45-2
 TEL 043-291-1831 (代)内178
 発行日 2007年1月15日

も く じ

創刊号特別

巻頭	どうぞよろしく 吉永 勝訓	1
事業の概要	太田 令子	2
報告	委員会の動き	3
報告	プロジェクト・班だより	4~5
報告	全国の動き	6
アンケート結果報告(1)	年齢分布	7
高次脳研修会		7
まめ知識コーナー		7
インフォメーション		8
編集後記		8

どうぞよろしく

こうじのうきのうしょうがいそうだんしえんたいせいれんけいちょうせいいいんかい
 高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員会

いいんちょう よしなが かつのり
 委員長 吉永 勝訓



高次脳機能障害支援モデル事業が終了して、1年が過ぎようとしています。平成18年度からは、千葉県独自に高次脳機能障害者のための支援事業実施することが決まり、拠点機関として当センターが指定されました。

これまで5年間の実績があるとはいえず、身の引き締まる思いで、この事業を受託致しました。10月からは、自立支援法の地域生活支援事業のうち「専門性の高い相談事業、広域的な対応が必要な事業」として、高次脳機能障害支援普及事業が位置づけられ、全国レベルで、高次脳機能障害者への支援が展開されることになりましたが、千葉県では、4月から活動を展開することができました。

実質的な活動が始まった上半期には、発行すべきでしたが、諸般の事情で山積みの課題を前に走り回っていたこともあり、みなさま方への広報が遅くなり、まことに申し訳ございません。

今年度からは、これまでの「新・モデル事業便り」から「こ〜じのう 掲示版」と装いも新たに、みなさま方に、私たちの活動を含め情報提供させていただければと思います。

こ〜くん



事業の概要

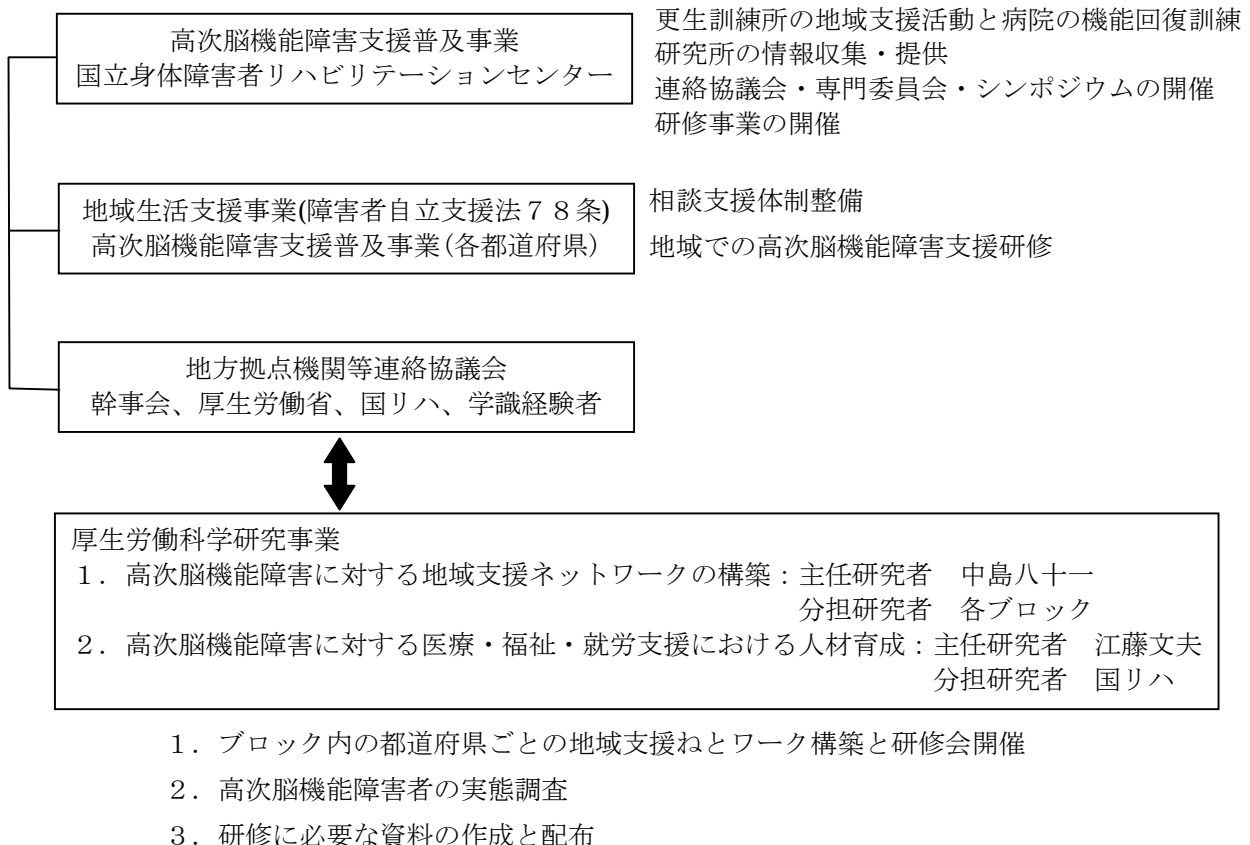
千葉県千葉リハビリテーションセンター
 地域連携部 太田 令子(支援コーディネーター)

千葉県の地方拠点機関(千葉リハビリテーションセンター)で実施する事業のイメージ図は、ホームページに掲載していますのでご覧ください。

ここでは、10月から施行された自立支援法の中で位置付いている、地域生活支援事業(障害者自立支援法78条)のうち、各都道府県実施の高次脳機能障害支援普及事業と厚生労働科学研究事業を、国リハの高次脳機能障害支援普及事業との関係も含め、図を用いて説明させていただきます。

このイメージ図は、第一回地方拠点機関等連絡協議会(平成18年10月20日)の席上配付された資料にあったものです。

で囲まれた各事業は、全国レベルで情報交換しながら進められていきます。しかし、第一回の地方拠点機関等連絡協議会にも、まったく参加する自治体のないブロックもあり、都道府県レベルだけでなく、全国の大きく10に分けたブロック(北海道、東北、関東甲信越、東京、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州沖縄)でも、その取り組み状況はまちまちというところではあります。



報 告 1

委員会の動き

地方支援拠点機関高次脳機能障害支援普及事業委員会報告

この委員会は、地方拠点機関内に於ける委員会として運営していくもので、構成員は高次脳機能障害支援普及事業に関わる各施設(医療施設、更生園、愛育園)と地域連携部の職員で構成されています。

メンバー 吉永センター長(委員長)、荏原第一小児神経科部長、大賀脳神経外科部長、宮前リハ療法部長、今野2A棟師長、小滝更生園自立支援科長、太田地域連携部長(支援コーディネーター)および事務局：江口地域連携部支援室長、米元副主幹、小松崎主査です。

検討してきたこと この事業を県から委託されて以後、全体の骨格に関わる検討を、この委員会で進めてきました。事業の計画ができた段階で、前半の任務は果たしたというところ

です。
①平成18年度事業計画について②相談支援体制連携調整委員会委員の候補者を選出③地方拠点機関の事業量のデータの取り方について検討しました。この事業実績の表し方は、県からもまたこれから高次脳機能障害の事業を始めようとしている全国からも、拠点機関になると、ア：どんな事業が、どれくらい出てくるのか、イ：そうした事業に対して、どういった人材がどれほど必要か、ということが問われたときに、きちんと応えていく必要がある、という意味でも重要です。

③の内容は、今後コーディネーター会議で引き続き検討することになりました。

ちば高次脳機能障害者と家族の会から、県に提出されていた要望書を受けて、県障害福祉課からは、以下の事業実施要望が出ています。①高次脳機能障害者支援のための障害の特徴や具体的な支援方法を含んだパンフレットを作成②高次脳機能障害に関するデータベースを作成③地域ネットワークの構築、以上です。

次に、地方拠点機関である千葉リハビリテーションセンターの事業推進プロジェクト・班の活動開始について確認しました。

①広報・啓発班(含むパンフレット)：江口 ②データベース作成班：大賀 ③市町村相談支援班：江口+太田 ④地域生活復帰支援プロジェクト：小滝 ⑤成人高次脳リハビリテーションプロジェクト：大賀 ⑥小児高次脳リハビリテーションプロジェクト：荏原 ⑦就労移行支援プロジェクト：小倉、以上です。
センター職員の皆さん 最後になりましたが、高次脳関係の資料データベースの中で、日常作業に使わない物がかつ出版物として出されている物は、図書室に寄贈してより多くの職員が利用出来るようにいたしました。多くの皆さんがご利用いただくと幸いです。

12/2

第6回千葉県千葉リハビリテーションセンター公開講座



当事者団体の情報提供コーナー
写真左 角田さん・日下さん

各団体等の相談・情報提供コーナーに、高次脳機能障害についての情報提供及びピアサポートとして「ちば高次脳機能障害者と家族の会」に協力をいただきました。



喫茶「ぷう」値段表
飲み物各100円・マドレーヌ、クッキー100円

喫茶コーナー『ぷう』に参加して

初めて『ぷう』の活動に参加させていただきました。役割を果たそうとする皆さんの姿が、とても生き生きとし印象的でした。「働くことの意味」を改めて考える機会となり貴重な体験でした。

更生園 三須



更生園の取り組み発表 佐藤・生澤

更生園の発表

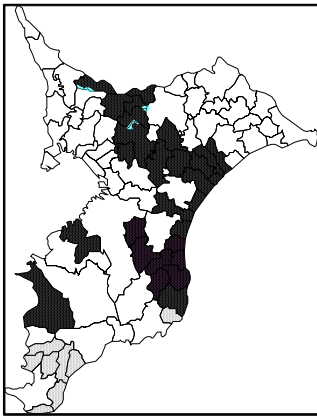
就労経験がない高次脳機能障害者の就労移行支援について事例報告を致しました。会場から、当施設の支援方法の確立や対象者についてもご意見を頂き、支援機関が担う役割について再認識することができました。

更生園 生澤

報 告 2

訪問済

未訪問



本年度訪問箇所
22市町村(24カ所)、
5中核支援センター、1機関

市町村相談支援班 1
平成15年度から、高次脳機能障害者についてのご相談、あるいは市町村担当者への理解を深めるために県内の市町村への訪問を実施してまいりましたが、残す1市1町の訪問で4年目にして県内すべての市町村にお邪魔したことになります。

手帳の交付申請、福祉サービスを受けようとするなどの際には市町村の窓口は必然的に関わるところでもありますが、情報提供を含めて一層の働きかけ、関係強化を今後とも行っていく予定でいます。

本年度から中核支援センターへの訪問も始めましたが、市町村も障害者の担当部署に限らず様々な窓口が関わってきますので、そういったところへも今後拡げていきたいと考えております。(市町村 江口)

コーディネーター会議
平成18年7月19日に第1回会議を開いて、支援コーディネーターの太田が支援センター事業全体の説明をしました。各コーディネーターは、各施設の関係職員に、当事業の進捗状況について報告することと同時に、支援センターとしての実績を把握するためのフォーマット作りが課題であることを確認しました。毎月第3水曜日を定例の会議日とし、12月まで6回開催してきました。

(支援コーディネーター 太田)



写真左から米元、三須、太田、森戸、間藤、江口

プロジェクト・班だより

このコーナーでは
千葉県高次脳機能障害支援センターの活動を時報告していきます

小児高次脳リハビリテーションプロジェクト班 2

当プロジェクト班は、医師・看護師・PT・OT・ST・臨床心理士・ケースワーカー・指導員といった職種計9名のメンバーで構成されています。活動内容は、外来通院児に対する高次脳機能障害カンファレンスの開催、小児リハビリプログラムの整理・障害別訓練プログラム集の作成、学校教職員との連携、家族支援を行っています。また、入園児に対する小児病棟用アセスメントシートの作成・試用や、これまでの社会復帰支援の効果判定を行うための家族へのアンケート調査も行っています。

今年度(12月末まで)の活動実績ですが、高次脳機能障害カンファレンスは29回実施しました。リハビリプログラムの整理は、今まで行ったプログラムの目的・内容を検討し、まとめる段階です。学校教職員との連携は、学校訪問(復学に当たってスタッフが学校を訪問し、生徒や教師、保護者へ高次脳機能障害について説明を行ったり、面談をすることで障害を負ったその児について理解を深めてもらい、よりスムーズな復学を目指すもの)を1回、連携会議(学校担任教師、特別支援教育コーディネーター、保護者が当センターを来訪し、担当スタッフと面談する)を1回実施しました。家族支援活動の一環として、昨年の9月に第3回家族交流会が、ご家族・養護学校職員・当センタースタッフ等28名が参加し行われました。家族交流会は今後も年2回の頻度で継続して行っていく予定です。(小児高次脳 間藤)

小児高次脳リハビリプロジェクト班会議の様子

写真左から、赤石、荏原、間藤、広瀬、菅原、高波、北村



成人高次脳リハビリテーションプロジェクト班 3

当プロジェクト班は、医療施設が中心となつてすすめており、医師・看護師・理学療法士（PT）・作業療法士（OT）・言語聴覚士（ST）・臨床心理士・視能訓練士・ソーシャルワーカーといった職種が参加しています。

このプロジェクトは①高次脳機能障害を持つ成人利用者の処遇検討（成人高次脳機能外来カンファレンスは月曜日に開催）②障害評価とこれまでの支援の効果判定・支援内容の検討③支援内容及び方法の調整と必要に応じて地域関係機関とのケア会議の開催④リハビリプログラムの整理とシステム構築 に取り組むこととして発足しました。

現在、成人高次脳外来カンファレンスを実施とともに、リハビリプログラムの整理とシステム構築に向けて会議を行っております。モデルを作り、どのようなプログラムが考えられるかを検討したり、実際に取り組んでいるプログラムを再確認しながらモデル化をはかったりしながら、より効果的なプログラムとシステム構築を模索しはじめたところです。

引き続きこれらの検討を行い、当センターを利用されている方にプログラムを提供しながら、よりよいものを築いていけるように、自分たちも学習をしながら取り組んでいきますので、よろしく願います。

また、高次脳機能障害に対する診断や評価などのできる県内の機関などの情報を得、皆さんが相談したり、利用したりできる機関の情報を少しでも多くお伝えできるようにすることも、当プロジェクト班が中心となつてすすめていくこととしております。（成人高次脳 森戸）

地域生活復帰支援プロジェクト 4

誰が？ 今年度は、主に日常生活の支援から地域生活の移行を支援している更生園（肢体不自由者更生施設）5名と、外来で地域生活の相談を受けている看護師の1名が担当しています。

何を？ このプロジェクトの目的は①実際行っている支援プログラムの判定および研究開発 ②医学的リハビリから社会リハビリへの切れ目ない支援プログラムの実施 ③地域生活を安心して送れるよう移行のための支援プログラムやその効果判定と家族支援 ④それぞれの目的に応じたプログラムの研究開発 の4つを柱に行います。どの柱にも土台になっているのは、プログラムの実施、検証と連携です。

どのように？ 先ずは高次脳機能障害支援モデル事業期間中から現在までの個別支援と連携について、事例を丁寧に検証し、その支援プログラムの効果を探っていくことから始めています。

いつまで？ 先ずこれまでの事例を検証し高次脳機能障害の「何に対して」「どのように支援した」かを今年度中にまとめます。現在進行中の支援も前記の柱を意識して行い、定期的に担当者が検討する場を設けていきます。

そして・・・ また、家族支援について更生園ではまだプログラムがありません。モデル期間中に外来の方々や家族会の皆さんと一緒に取り組んできたことを踏まえて、来年度には更生園の支援プログラムとして位置付け、実施出来ることを目標としております。（地域生活 小滝）

就労支援移行プロジェクト 5

更生園では2005年度から「職業前リハビリテーションプログラム」を開始し、復職・一般就労を希望する方々への就労移行支援を行なっており、今年度から「就労移行支援プロジェクト」として高次脳機能障害の方の支援プログラムの開発にも取り組んでいます。プロジェクトの目的は、①当事者の社会リハビリの検討、②障害評価とこれまでの支援の効果判定と支援内容の検討、③支援内容及び方法の調整と就労関係機関との連携と家族支援、④就労移行支援プログラムの整理とシステム構築、⑤障害者職業総合センターへの研究協力の推進、となっております。

更生園では「働き続ける」ためには職業面のみでなく、生活面での力をつけることも必要と考えています。そこで高次脳機能障害の特性はもとより、運動機能、社会生活能力、職業面など様々な角度で評価し、当事者の生活面と職業面での課題と方向性を整理し支援を進めています。その活動の中で就労につながる「社会生活能力評価表」を独自に作成し試行を始めました。プログラムの内容は、通勤能力、学習、パソコンなどの訓練と職前リハコースがあり、職前リハコースでは各自の障害の認識を深め、高次脳機能障害に対する補完方法・対処行動獲得も含めた職業準備性を高める支援を行なっています。この支援を通して、当事者自らがお自分の障害特性に気づき、障害に向き合うという経験が生まれています。園内でのプログラムで一定力をつけたあとは園外の就労関係機関との連携（実習など）により就労の可能性を広げる支援にも取り組んでいます。（就労 小倉）

報 告 3

全国の動き

■第1回地方拠点機関等全国連絡協議会報告

日時：平成18年10月20日
 場所：情報オアシス神田
 出席者：厚労省委員7名、33都道府県担当者、学識経験者13名
 オブザーバー：5当事者団体、4学識経験者、6都道府県関係者

議題；1. 高次脳機能障害支援普及事業の概要について
 2. 高次脳機能障害支援普及事業関連研究事業の概要について

議論になったこと：各県では、支援コーディネーターにどんな人物を配置すればいいのか、常勤でないとならぬのか、といったことが現段階では重要課題のようです。人を一人常勤で雇うとなると、この事業が一定年限で終了し事業補助もなし、後は県で考えろと放り出されかねない。そんなところでしょうか。

感想：当事者団体からのオブザーバーで参加されていたのですが、委員ではないということが発言できませんでした。昨年度までの、後期モデル事業では当事者団体から委員が選出されていたことを考えると、ちよつと残念です。まだ未開拓な事業だけに、当事者と一緒に育てていければいいのになあ、というところでしょうか。
 場所：情報オアシス神田

出席者：厚労省委員7名、33都道府県担当者、学識経験者13名
 オブザーバー：5当事者団体、4学識経験者、6都道府県関係者

■平成18年度厚生労働省科学研究費補助「高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究」

第1回関東甲信越ブロック会議報告
 日時：平成18年10月30日
 場所：東京都心身障害者福祉センター
 出席者：茨城県、栃木県、群馬県、千葉県、神奈川県、新潟県、長野県、埼玉県関係者 計17名
 (山梨県は欠席)

議題；1. 平成18年度厚生労働省科学研究費補助「高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究」について
 2. 神奈川県リハビリテーション支援センターにおける高次脳機能障害者支援の取り組み
 3. 参加各県の高次脳機能障害者支援の現状と今後の予定について

議論になったこと：各県の取り組み状況は様々で、予算措置されているところやゼロ査定など、財政的な基盤もまちまちです。

地方拠点機関も医療機関であったり総合福祉センターであったりいろいろでした。それぞれの地域に合わせたやり方で、互いに知恵を出し合せて進めていくことが大切です。せっかくなので機会だから、できれば当事者団体の人たちもメンバーに入れて会議を進めてはどうかという意見が出て、みんな納得でした。

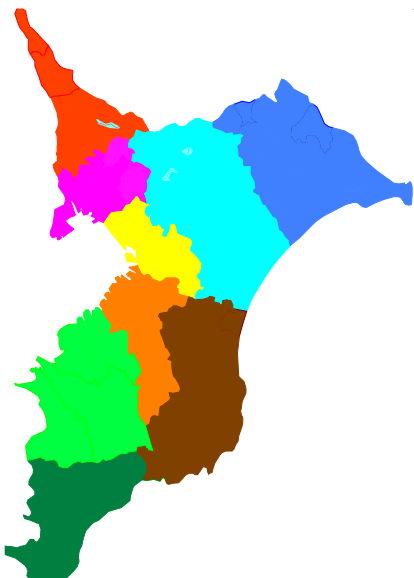


■第1回高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員会報告

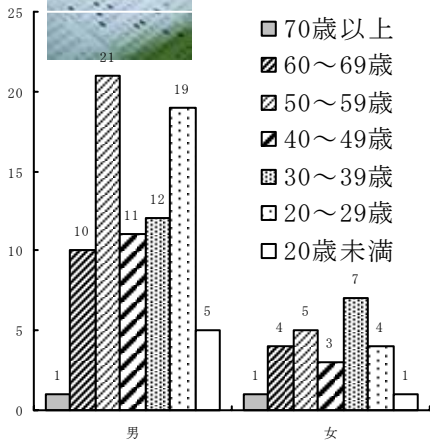
日時：平成18年9月5日
 場所：千葉リハビリテーションセンター
 出席者：連携調整委員会委員 12名(外部委員8名、センター内部委員4名)
 議題：1. 委員長および副委員長の選出
 2. 平成18年度事業の実施について(千葉県リハビリテーションセンターホームページをご覧ください)

議論になったこと：1. この事業実施にあたり、事業毎でかかる費用が出され、それに基づいた予算が計上されるべきで、県もそれによって財政措置をしてもらいたい、との要望が出されました。

2. 地方拠点機関として、全県に責任を持つことはキャパシティとして今後困難であっても、広く県内にこの事業の存在と進捗状況や課題を広報してもらいたいという要望も当事者団体から出されました。
 3. 千葉県リハビリテーションセンターには、千葉県の核として、高次脳機能障害者の通所事業にも手を付けて欲しいとの要望もありました。



アンケート結果報告【1】



*回答いただいた方々の年齢は、男女ともにM字型の分布を示しています。しかし、男性の若年の山が20代であるの比べ、女性の山が30代にあります。また男性の年齢分布では、山は50代となっています。年齢分布のM字型の山は、男性の方がハッキリしていました。

当センターは平成13年度から開始された高次脳機能障害支援モデル事業の拠点機関のひとつとして、高次脳機能障害患者様に対するリハビリテーション技術・社会福祉支援体制の向上、高次脳機能障害に対する一般の方々や医療従事者への啓蒙活動等に努めてきました。支援モデル事業は昨年3月を以って終了となりましたが、この期間に当センターをご利用いただいた高次脳機能障害の皆様が現在どのような生活を送られているかを把握することは、社会支援を含めた今後の高次脳機能障害リハをさらに発展させていくうえで大変有意義な作業であり、当センターの果たすべき重要な使命のひとつと考えて、223名の利用者の皆様にアンケートを実施致しました。その結果の男性79名女性25名にご協力をいただいた結果の一部を、シリーズでご報告します。

アンケート結果の報告(1) 年齢分布について



高次脳研修会

■平成18年度高次脳機能障害支援事業関係職員研修会報告

日時：平成18年7月5日(水)～7月7日(金)

場所：国立身体障害者リハビリテーションセンター学院

出席者：行政障害福祉担当及び支援機関(病院・福祉施設)職員

- 議題：1. 障害者自立支援法について
 2. 高次脳機能障害支援モデル事業について
 3. 医師・訓練・心理各専門職からみたりハビリテーションの実際について
 4. 生活訓練・職能訓練及び家族支援の実際について

感想：3日間に渡る研修にもかかわらず、H18年度から打ち出されている高次脳機能障害支援普及事業の実施をにらんでか、ほぼ全都道府県の障害担当者が参加していました。研修の趣旨を大別しますと、前半は自立支援法及び支援モデル事業のおさらい、後半は具体的な支援アプローチについての各論といった所でしょうか。残念ながら支援事業実施の義務化には至らなかったようですが、それでも、今まで支援に大きな地域差があったことに比べれば、都道府県単位で実施するよう明文化されたのは1つの進展ではないでしょうか。また、実際の支援機関に所属している我々スタッフも、専門職として一層自己研鑽に努めなければと再認識する内容でした。

(千葉リハ地域連携部 平澤)



こちらでは、障害に焦点をあてた中の生活で使える訓練をまめ知識として掲載していきます

*エビデンス…効果があることを示す根拠

在宅において簡便で*エビデンスも報告されている高次脳機能(今回は前頭葉機能の賦活)に対するリハビリテーションを1つ紹介します。それは「後だし負けじゃんけん」と言われるものです。この「後だし負けじゃんけん」では特に前頭葉の機能を高めると言われています。一般に「勝つ」ことが良いとされることに「負け」なければならぬことで注意・集中を高めることができます。方法として、二人でじゃんけんをしますが患者様は相手の出したものに対して、後だしで負けるようになります。例えば相手がグーであれば、遅れチョキを出すようにすれば良いのです。また、この「後だし負けじゃんけん」の応用として「後だしあいこじゃんけん」があります。これは、後だしで「あいこ」になるようにすれば良いのです。

今回紹介した方法は、特別な道具や場所が不要で、相手がいればその場で行える簡便なものです。ゲーム感覚で行ってみてはいかがでしょうか？

千葉リハ理学療法科 川上貴弘



インフォメーション・おしらせ

information

第3回高次脳機能障害リハビリテーション講習会

日時■2007年2月10日(土)
 会場■ポートプラザちば
 〒260-0026 千葉市中央区千葉港8-5
 参加費■無料 定員■300名
 内容■
 ①記念講演「高次脳機能障害一障害像と支援の課題」大橋正洋(神奈川リハビリテーション支援センター所長)
 ②シンポジウム「高次脳機能障害：発症から地域での自立生活までの連続した支援を！」
 問い合わせ先■千葉県千葉リハビリテーションセンター地域連携部 地域支援室
 TEL043-291-1831(代)内線182

第2回在宅就労セミナー

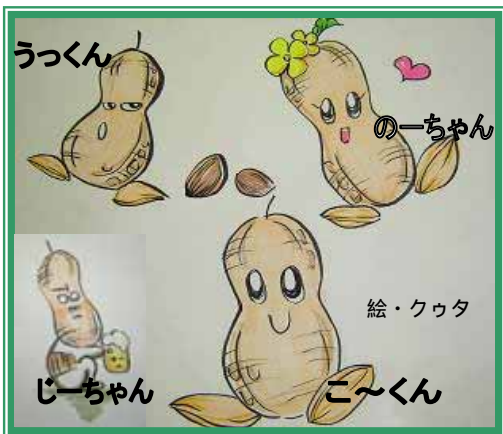
～障害者雇用促進法改正で、在宅就労に何が起る？～
 日時■2007年2月14日(水) 13:30~17:00
 会場■六本木ジョブパーク 2F 大会議場
 東京都港区六本木 3-2-21
 (地下鉄六本木一丁目駅より徒歩3分)

参加費■無料・要申込 定員■100名程度
 内容■
 ①講義「在宅就業障害者支援制度と支援団体について」厚生労働省職業安定局
 ②講演「顧客が求める仕事、人材とは～在宅ではたらく方々へのメッセージ～」秦政氏
 ③パネルディスカッション「雇用されないで働くという選択～在宅就業(SOHO)の今、そしてこれから～」
 共催■東京労働局
 申し込み、詳細は下記のページで確認
<http://www.tocolo.or.jp/syokunou/seminar2.htm>

第5回高次脳機能障害交流会

日時■2007年3月24日(土) 13:00~16:00
 会場■千葉リハビリテーションセンター
 参加費■無料
 内容■未定
 問い合わせ先■千葉県千葉リハビリテーションセンター地域連携部 地域支援室
 TEL043-291-1831(代)内線182

★こ〜じのう掲示版ではご意見、ご感想、情報をお待ちしております！
 お送り頂いたものを掲示版に役立てていきたいと思っております。
 宛先メールアドレス kouji@chiba-reha.jp



私たちが表紙を飾るマスコットです！
 これからよろしくねっ！

編集後記

■創刊号が発行することができました。今後も皆さんの協力を得ながら「こ〜じのう掲示版」を成長させていきたいと願っております。よろしくお願いたします。
 発行の過程を知る人からは、「こ〜じのう掲示版は一回限りでは？」
 「編集長は代わったほうがいいのではないか？」との声もチラホラと・・・でも・・・次号以降も続くことと思えます。
 なんといっても、他の編集メンバーがしっかりとれていますから、大丈夫ですよ。あんしん安心。(こんなことでもいいのだろうか)
 次号以降の予定をここで報告いたします。来年度からは、4回の定期発行(6月・9月・12月・3月)としていきます。状況に応じ、臨時号も必ず計画としております。もしかすると今年度中にも臨時号として発行するかも・・・。
 乞うご期待!!(M)

■これまででも、発行しなければ・・・と思いつつ、先延ばしにしていた。が・・・ある日突然「発行します！」という天の声が降りてきて・・・？アタフタしての第一号です。急ごしらえですので、これから号を重ねていく中で紙面の構成も考えていきたいと思えます。とりあえず、一緒に働く人や高次脳障害に苦しんでいる人たちに、できるだけ支援センターの現在が判るような紙面作りを心がけていきます。よろしくお願致します。(O)
 前回の新・モデル事業が終わり、せっかくなに付いた？編集のスキルが今回の掲示版によって全開発揮！前より磨きをかけて編集に邁進していく気持ちであります。モデル事業でのマスコットは「ドリ姫」でしたが、今回は、千葉と脳にちなんでピーナッツをマスコットにしようと考えました。私が書いたのは、ピーナッツ？雪だるま？と言われるくらいヘタクソでして、それならば、切り札と知り合いのクウタへ依頼。まあ、かわい！と言うことで表紙を飾ることとなりました。ついでにキャラの名前も地域連携部で命名しました。左の絵は毎回表紙を飾ることになります。このこ〜じのう掲示版とともにみなさんかわいがって下さいね!(Y)